

古代吉備を探る(1)

会員 吉備槌太郎(本松一郎)

1. はじめに

日本の古代史は謎だらけで、その一つの大きな要因は7世紀末から8世紀における古代史の抹殺説があるが、同感であり古代に力を持った地方の国についての記録は一般に少ないが、特に吉備に関する記述は少なく意図的に消されたと思われる。

消された理由は全国を武力で無く、食料の米や生活用品技術などを供与する事で全国を平和裏に統一している。大王の饒速日(はぎはやひ)尊は西日本は元より東北地方でも人気があり、歴史上から消され、父親の素盞鳴尊は国民に特に人気が高い為に政治的意図で暴れ者とされ、貶(おとし)められている。この時期に古代日本の歴史が歪められ、消されたと原田氏や関祐二氏等は記述される。

この消された時代の日本に関して、古代史研究家の齊藤忠氏によれば、周代中期の紀元前11世紀には倭人の礼節は既に当時の中国の人々にも認識され、孔子も絶賛する「倭は平和な連邦国家」で孔子自身も「東夷の九夷に住みたい」との記述から九州であろうと推察される。

時代は経ても日本は長く平和な時代が続いた筈である。大和国を建国した初代大王は吉備国や明石国と関係が深く、明石国とその周辺には大歳尊を祀る神社が極めて多く大和へ登る為の拠点であったと私は推理している。

吉備は大和大王饒速日尊(大歳尊)や国譲神話で有名な大国主尊の誕生と居住も考えられる。「宇弥神社」は大国主尊と確信するが、「うみ(海)神社」もあて字で大歳尊?と推理している。

古代吉備の歴史や丹国、越国、若狭国、近江国と、火の国、豊国など古代の主要な国も徹底的に消され、忠臣蘇我氏を謀反人に捏造しているが、現在も真逆の歴史がまかり通っている。この事実を含めて歴史の解明に協力して「正しい

古代史の謎解き」に居住地の利点を生かして、真実の発掘に挑んでいます。

2. 神乃邊の最中央部を守る東西南北の家

古代吉備国の国境(くにぎかい)と神域の中央部にも、守神(賽の神)を陰陽五行思想によって中央部(神目)から等距離に設置していた。配置場所を確認すれば古代吉備国の範囲と神域の重要度が推定できる。国境の守神(賽の神)を念のために記すと、東は、今は無い摂津菟原住吉(後に摂津の西から東に遷し住吉大社建立と推理)。北は出雲佐太神社。西は伊予(大三島)大山祇神社。南は四国山脈剣山付近の古社だが未特定である。この東西南北が等距離の守神(賽の神)の位置であり、ほぼ古代吉備国の範囲に近いと推理している。

さらに今回ご報告をするのは中央部にも神域を守る東西南北の守神(賽の神)が配置されていた。それもズバリ、東家、西家、南家、北家であった。

さらに、まだ確定は出来ないが、二重に東西南北の家が設置されていた可能性が高まっている。

南氏は久米南町の最南部の安ヶ岬に居住され、久米南町最北部の筒の宮山や笛吹山麓の北庄に北氏が、さらに、古来の配置場所とは大きく異なり移動されているが建部町西部と播磨の石の宝殿で東氏の居住は確認出来た。西氏は情報が無く時間を要したが3方向の家の存在から西氏の存在を想定したが、後に旧賀陽町に、さらに建部町でも西氏の居住が確認され、全ての東家、西家、南家、北家が揃った。この結果から、強く陰陽五行思想に影響を受けた古代吉備国と神乃邊の姿が想像される。なお、先に二重に東西南北の家が設置された可能性に関して少し述べれば、東氏と西氏と北氏の現在の居住場所を地図上に描くと、南氏を除く東西北の家は2ヶ所に居住されるが、古代の配置であり、人の移動は常であり、確かとは言い難いが可能性としての話である。確信的には、過去の吉備の最中央部に古族(槌、物部、大国、加茂の66家と葛城等の9家)の75家すべてが存在し、吉備が全国の中心的な役割を果たしたと思われ、陰陽五行が基の政治で東西南北の磐座、寺社、家

の配置もされたと思います。なお、詳細配置に関しては現在も調査中です。

3. 津山中山の物部氏と神乃邊

神乃邊神目の天王山には和同年間の吉備前国の分国時に津山中山を追われた肩野物部長者乙磨呂が行き先を失い、先祖の槌(土)一族がいる神乃邊(当時は加賀美庄、後に弓削庄)に逃れ、最初は天王山の麓で松尾谷(大霜谷)の西に祀る岩井神の傍に中山の神を祀り、屋敷を建てた後に屋敷の傍の伊勢谷に移したと伝わるが、和同6年に天王山の頂上付近に津山中山の豊穰の地を奪った不比等系とする「しろ、ごろ」の敵名をかぶせた志呂(しろ)神社を建立するが、先祖地での物部勢力再興を恐れた中央が吉備前国でも神域で影響力を残していた中心部を意図的に分割して美作国を建国(来年に向けて現在は美作國建国 1300 年祭実施中)している。

この志呂神社は、実質は城の役割を担い南からの守りに建立されている。参考に述べれば肩野物部長者乙磨呂が和同3年に建立した仏教寺の資料には饒速日尊から6世孫(5代目あり)の伊香色雄(いかがしこお)命の後である。天孫本紀で伊香色謎(いかがしこめ)命=古事記は伊迦賀色許売命の弟で、姉は孝元天皇⑧の妃で開化天皇⑨の皇后であり崇神天皇⑩の母ともある。崇神7年8月しばしば災害のある事を憂いておられた天皇に穂積臣の遠祖大水口宿禰ら3人の奏上する各人の夢に貴人が現れ、大田田根子を父の大物主大神の祭主とし、市磯長尾市をもって倭大国魂神を祀る祭主とすると天下泰平になり、物部連の祖・伊香色雄命(いかがしこお)は神班物者(かみのものあかつひと)に任じられ、物部八十手に作らせた祭神の幣帛(へいはく)を以って大物主、倭大国魂神を祭後に八十万の群神を祭ると疫病は止み国内は鎮まったという。(紀) そのとき布都大神を祀る社を石上邑に遷し、天璽瑞宝(あまつしるしみずたから)も合わせて祀って総称である「石上大神」を氏神としている。記の崇神段に伊香色男命に命

じて天の八十平瓮(やそいらか)を作り天神地祇の社を定めたとする。旧天孫本紀は父は大綜麻杵命で母は高屋阿波良姫と記載している。

阿波良姫と関係すると思われる神乃邊神目の東端の峠地区(古代に栄え分国で真半分)の峠神社には伊邪那美尊が主祭神で、配神として阿波良和尊(伊勢天照皇大神宮神主)が祀られ、伊勢神宮に問合せも古い記録は無く不明であった。時代的に確定は出来ないが阿波良姫と前後はしても近い時代と思われる。そして時代は多少異なるが建部町(御名代の地)の名の基である大和武尊が伊勢で草薙剣を叔母から授かった事の解明の糸口になると思われる。さらに、関連する神乃邊の地名として旧加茂川町に阿波良の地名があり、神社は愛宕神様を祀るから槌系と推理できる。伊香色雄命の孫には葛城氏・蘇我氏・紀氏・波多氏・巨勢氏・平群氏などの中央諸豪族の祖とされている武内宿禰がいます。なお交野関連を調べると乙磨呂の先祖である伊香色雄命は大臣となり一族に物部の姓を賜っている。その子で多弁宿禰は交野連(かたのむらじ)となり天野川流域を開拓し、稲作を盛んにしているが、この頃より肩野物部と呼ぶようになったと記してある。

4. 赤石の謎を探る

昔の我家の屋敷跡は松尾川を取込だ造りと思われ、松尾川の中州には赤い大きな磐座が存在した。約2千年以上も経過して表面は傷み苔も生え黒ずんでいたが、実に風格ある綺麗な赤石だったが、十数年前の河川改修時に業者が関与したらしく盗まれている。大きさは周囲約3.5~4.5mで地上高は約1.5mだが赤石様と呼ぶ赤い磐座が存在した。岡山大学大学院地質学の鈴木教授は、赤石は花崗岩中にまれに在るが、このような綺麗な磐の存在は極めて珍しいと語られ、この地層は備前と播磨の境で地中に潜り込み、明石(赤石)辺りで再び地上に現れる。調査結果で赤石は全国に祀られている。主な場所として、兵庫県明

石(赤石)は吉備の一族が大和に入る前の拠点の明石国で、三重県熊野本宮や伊勢神宮の内宮にも存在し、北は平成 24 年 10 月にお伺いしたが、東北の岩手県柴波(柴波は石の赤紫色で赤石神社)から南は熊本県宇土や宮崎県高千穂の赤石神社まで各地に赤石神社が存在する。神社以外に石棺や石室にも赤石が使用され、さらに古墳の謎を解く鍵と言われる楯築遺跡や吉備の中山頂上部の磐座からも水銀朱(朱は硫化水銀で高貴な色)が塗られた磐座が幾つか確認されている。

吉備の造山古墳や千足古墳をはじめ滋賀県に至るまで熊本県宇土市(平成 22 年に元松市長を訪ね宇土訪問)の赤石が石棺に使用されているが、当地にも赤石神社が存在する。吉備と九州火の国との関係を示す造山古墳群の中の陪塚第 5 号古墳は 5 世紀後半に造られた全長 75 m、三段築成の前方後円墳で千足古墳または千足装飾古墳と呼ばれている。



千足古墳



公開時写真

吉備地方で最も古い形式の横穴式石室が築かれている。資料を転記をすれば「石室の構造や直弧文様は九州西北部の装飾古墳の石室に類似し、被葬者が北部九州との深い繋がりを示唆している(部分削除)」と記述され、古代の九州、特に「火の國」との深い関係が確認出来る。明石(赤石)に関しては古くは満潮で沈み干潮で赤石が見えた記述や船上からの参拝記述もあるが、伊能忠敬の地図と陸軍省の地図で場所が異なり、現在の明石市の潜水調査写真と昭和初期に記述の磐の大きさは異なると思われ、類似の赤石が複数存在する可能性もある。



赤石神社



宇土馬門石 石切場

平成 19 年夏に薬師寺氏の本に古代の謎を解く重要な遺跡、楯築遺跡の磐座は朱で赤く塗られていたと記述される。古代の兵庫県南部に赤石が在り、大化改新の前は、明石国が存在し明石郡、美囊郡、加古郡、印南郡の四郡が明石国とされるが、後に播磨国と一体になっている。

新たに記述するが、群馬県南部の伊勢崎市に赤石郷が存在し、戦国期にも赤石と呼ばれていた事が判明した。調べると平成 19 年(2007 年)に隣接の太田市と特例市に成り、赤石郷は 1566 年(永禄 9) 由良氏がこの地の年貢を伊勢神宮に献じ、たことから伊勢前(いせさき)と呼ばれ、転じて伊勢崎となっている。



宇土の赤い石棺と古代船

群馬関連では 40 年も前に前橋の治山関係者から群馬県と岡山県の山は良く似ており古くから山上まで人が住んだ小便山が多いと聞いていたが、5 年程前に我家先祖が古代と戦国期に関係をした備前と美作の國境の天王山に在った簔ヶ瀬(伊勢畑)城跡を「美作全域の中世山城の縄張図の作成」に尽力された山形省吾氏に調査して頂いた。この時に群馬周辺の山城を全て廻られた息子さんも同行され、群馬にもほぼ同じ山城が存在する事を指摘された。その後の調査はして無いが戦国期にも関係が有った可能性も残る。

(1)「赤色、朱色」に畏敬の念を持った古代人

赤石様は赤神石?とも言い、先にも述べたが大きさは周囲が約 3.5~4.5m で地上高は約 1.5 m(地中は不明で+α)の赤い磐座(いわくら)が工業者に盗まれている。赤色、朱色に関して他から借用記述すると『“朱色”は生命の根源である血の色で生命の躍動を示す。水銀から採れた朱色は色があせない事から、古代人にとっては“生色”・“死の色”でもあり、邪霊・悪

霊を排除する僻邪(へきじゃ)の色ともされてきた』とする。さらに『稲荷社に朱色の鳥居を立てるのは、単に標識・飾りというより、社・霊地の神聖性を守る呪的行為で鳥居そのものが、聖と俗の境界・結界に立つ呪物であることから、その呪力をより強力にするのが朱色ともいえる』とある。

6世紀前半の継体大王の陵墓とされる今城塚古墳(大阪府高槻市) 7世紀前半の推古女帝の初陵とされる植山古墳(奈良県橿原市) など、おもに関西のいくつかの石棺に熊本県宇土半島産の阿蘇ピンク石(阿蘇溶結凝灰岩)が使われていることは、これまでの研究で明らかになっている。

(2) 九州以外で確認の阿蘇ピンク石(馬門石) 石棺

阿蘇ピンク石(馬門石)

1	造山古墳	岡山県	岡山市
2	築山古墳	岡山県	瀬戸内市
3	長持山古墳	大阪府	藤井寺市
4	峯ヶ塚古墳	大阪府	羽曳野市
5	今城塚古墳	大阪府	高槻市
6	籾子塚古墳	奈良県	天理市
7	東乗鞍古墳	奈良県	天理市
8	植山古墳	奈良県	橿原市
9	兜塚古墳	奈良県	桜井市
10	慶雲寺	奈良県	桜井市
11	金屋ミロク谷	奈良県	桜井市
12	野神古墳	奈良県	奈良市
13	円山古墳	滋賀県	野洲市
14	甲山古墳	滋賀県	野洲市
15	千足古墳	岡山県	岡山市
16	小山古墳	岡山県	赤磐市
17	築山古墳	岡山県	長船町

戦国期迄の元松屋敷を流れる松尾川の州には赤い磐座の赤石様が十数年程前まで存在し、西に約100m真西の荒神様の御神体も赤石であり、毎年12月第一日曜日に荒神祭が行われ、今年も甘酒の元を御供えした。就実大学先生で

元岡山市文化財課の出宮氏は吉備中山の磐座で朱成分の検出を聞かれており、古代の神々と我家先祖榎系を解く鍵になる予感がする。19年6月に熊野三社参りで古代に一族の移動伝説があり苗字七千傑の斎藤氏資料(ネット上)に記述の熊野で本宮道の駅に「赤石の磐座」があり驚いた。早速に語部の坂本勲生氏に調査を頂いたが、この磐は三越川で榎を御供えしてた磐であった。調べると古来の本宮は熊野川・音無川・岩田川の合流点の「大斎原(おおゆのはら)」と呼ばれる中洲にあったのですが、明治22年の洪水で多くの社殿が流出し、流出を免れた社殿を現在地に遷しており、赤い磐座は古来からの磐座の可能性はある。なお神功皇后の帰京前の香坂王と忍熊王の反乱の記述には天皇之陵＝赤石(明石)とも記述されている。

5. 神乃邊に畑氏の中央部もあったか?

最中央部(小領域)の北部に畑氏の地区が在り、現在の宮地神社辺りを中心とする東畑、西畑、南畑が存在した。しかし、北畑の地名は見出す事が出来なかったが、道の駅の辺りやや北東が最も北畑が存在した地と推理できる。塩之内の北部に羽出木があり波多氏の波多神社があり、誕生寺の法然上人の父は押領使漆間時国(うるまときくに)で、母は秦氏君と記載され詳細不明ながら宮地か羽出木の出身と思われる。熊谷直実は桓武平氏との説もあるが、石橋山の戦いの後は源頼朝に臣従し御家人となるが、平清盛の弟である平経盛末子の平敦盛と一騎打ちで若い敦盛の首を落とし、世の無常を嘆き出家し、浄土宗他力念仏門の開祖、法然上人降誕の聖地、上人誕生の旧邸を建久四年(1193)法力房蓮生(熊谷直実)が法然上人の命を奉じこの地に来て寺院に改め誕生寺を建立をしたとする。

おわり

今回は吉備神乃邊と赤石に関して記述したが、次回は、神乃邊の神饌が近畿方面に広まった事が判明したのでご報告致します。